

知的障害教育における対話的な学びの探求（3）

— 中学部における「『友達のかえを受け止め、選択・行動する力』を
育む授業作り」 —

岩松 雅文・川中子靖代・山崎 有子・中山 道子・岡澤 慎一

知的障害教育における対話的な学びの探求 (3)[†] — 中学部における「『友達の考えを受け止め、選択・行動する力』を 育む授業作り」 —

岩松 雅文*・川中子靖代*・山崎 有子*・中山 道子*・岡澤 慎一**
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*
宇都宮大学大学院教育学研究科**

本稿では、知的障害特別支援学校における対話的な学びの在り方について、授業実践から見てきた生徒一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、中学部における対話的な学びに対する考え方を提案する。今年度は、学部テーマ「『友達の考えを受け止め、選択・行動する力』の育成」を踏まえ、授業作りのポイントや有効な手立て、生徒の具体的な学びの姿について検討しながら、対話的な学びに基づく教育実践を積み重ねてきた。その結果、授業実践において教師は、普段から生徒との関わりを大切にしたり、生徒の思いや考えを整理して返したり、実感をもって学ぶことができるようにすることが重要であることが分かった。また、本校中学部では、他者の気付きを受け止めるという主体的な活動を通して、生徒同士や生徒と教師が丁寧なやり取りを重ね、その過程で生徒自らが気付いたり考えたりしたことを次の選択や行動につなげていくことが、対話的な学びの一つのかたちであると考えた。

キーワード：知的障害特別支援学校、友達、受け止め、対話的な学び

I はじめに

本校の中学部生徒は、知的障害の他に、自閉症、ダウン症をはじめ、プラダウィリー症候群やウィリアムズ症候群などの障害を併せ有する生徒が在籍しており、実態も多岐にわたっている。生徒それぞれ

によって細かな課題はあるものの、ほとんどの生徒が、日常生活動作や友達とのやり取りなどに積極的に取り組むことができる。また、生活を重ねるなかで他者との関わりが広がり、特定の教師だけでなく、様々な教師や自身の学年以外の友達にも関心をもつようになり、友達の頑張りを素直に認めることができる様子も見られている。しかし、自分の思いを強く通そうとする生徒や、友達の思いを受け入れながら適切な行動に移すことが難しい生徒も見られる。

中学部では、これらの生徒の学びの在り方を考えるにあたり、「友達の考えを受け止め、選択・行動する力の育成」をテーマに掲げ、三年間の研究計画を立て、教育実践を行ってきた。その結果、一年次の研究を通して、生徒自身が「友達の考えを受け止める」ためには、自分自身の考えをもつことが必要であり、学習活動や教師の指示内容について、生徒が「できる」、「分かる」状況を設定することが重要であることが分かった（牧田・富川・山崎・岡澤、2020）。また、そのための授業作りのポイント整理を行った。さらに、生徒の表出やそのときの内面を

[†] Masafumi IWAMATSU* and Yasuyo KAWANAGO, Yuuko YAMAZAKI, Michiko NAKAYAMA, Shinichi OKAZAWA**: Exploring Dialogical Learning in Education for children with Intellectual Disability (3): Creating Lesson that foster the ability to accept the ideas of friends, make choices, and take action in junior high school student
Keywords: Accept, Friends, School for children with intellectual disability, Dialogical Learning

* Special Needs School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

** Graduate School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: okazawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

大切にしながら、丁寧にやり取りを積み重ねていくことも必要であることも分かった。二年次の研究では、事例研究を通して、「選択・行動する力」を育成するためには、生徒が体験を通して学習できる場面を多く設定することや、興味・関心に応じた具体的な選択肢の中から選ぶ活動を多く設定することが有効な手立てとなり得ることが分かった（岩松・岡澤，2021）。その一方で、表出方法の異なる生徒一人一人の思いに対して、教師がそれをしっかりと受け止めることへの難しさがあるという課題が見られた。そのため、教師は、それぞれの生徒にとっての有効な手立てを検討し続けることが重要であると考えた。

そこで、研究の最終年次である今年度は、これまで取り組んできた実践を基に、授業作りのポイントの整理と精選を図っていく。さらに、ポイントを活かした授業実践から見えてきた、生徒一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、本校中学部における対話的な学びについて考え、一つのかたちとして提案したい。

Ⅱ 目的

本研究の目的は、授業作りと生徒一人一人の学びの姿や手立ての検討を通して、本校の中学部における対話的な学びの在り方について検討し提案することとした。

Ⅲ 方法

学部テーマ「『友達の考えを受け止め、選択・行動する力』を育む授業作り」を踏まえ、一人一人の目指したい姿を設定し、授業作りのPDCAサイクルを基に、教育実践を行った。

Ⅳ 結果

1 「地図にまとめよう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

本単元では、学校がある「宇都宮市について知ろう」というテーマのもと、公共施設の見学や公共交通機関の利用を通して、宇都宮市の交通、歴史、名所等の主な事柄について学ぶことをねらいとした。学校や自宅等の情報も入れた宇都宮市全体の地図と、市の中心部を拡大し、見学して気付いたことをまとめた地図を学習活動に応じて作成することで、宇都宮市をより身近に感じ、自分の生活と結びつけ

て学習できるようにしたいと考え、本単元を設定した。

(2) 授業作りの工夫

本時の指導では、友達が撮影した写真や作成したメモを、見学した施設ごとに分類し、地図の素材を作成する学習活動を設定した。

授業の導入時には、他者の思いに関心がもてるよう、友達の作成したメモや写真を使用して活動することを伝えるようにした。

展開時には、生徒の机を横に並べ、二人組で伝え合う活動を設定すること、思いを表出したり、伝え合ったことに納得したりできるよう、写真を活用したやり取りを設定すること、生徒が安心して学習活動に取り組め、生徒同士の関わり合いが広がるよう教師が支援（仲介・代弁など）をすることといった工夫を行った（図1）。

最後のまとめ時には、他の生徒が気付いたことや疑問に感じたことに対し、関心がもてるような活動や教師の言葉掛けを工夫した。



図1 二人組で伝え合う活動の様子

(3) 実践をふり返って

本単元では、二人組の活動を複数回取り入れたことで、友達と共に学習する意欲が高まったように感じた。施設を見学した際には、自分が撮影した写真を友達と見せ合う姿が見られた。見学後の授業では、友達が行う発表に関心をもち注目して耳を傾ける姿や、友達に自分の考えを知ってほしいという思いをもって発表している姿が見られた。二人組での活動は、関わる相手が一人となる。そのため、自分の思いを伝えたり聞いたりする対象が限定されることから、関わりは成立しやすい。その反面、二人の相性によってはうまくいかないことも想定された。そのため、活動の成否は、教師の支援にあると考える。生徒が安心して意思を表出できる状況作りや、普段

からの生徒と教師、生徒同士のやり取りの積み重ね等を、今後も大切にしていきたいと考える。

2 「ポスターにまとめよう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

本単元では、自分が住んでいる「栃木県について知ろう」というテーマのもと、栃木県庁や周辺施設について調べて校外学習に活かし、さらに実際に見学して分かったことや思ったこと等をまとめていくことをねらいとした。生徒が実際に調べることで関心をもった場所や、施設等を選んでウォークラリーポイントを作り、一連の探求的な活動を通して、友達と協力して活動する良さや地域に対する関心を深めていけるようにしたいと考え、本単元を設定した。

(2) 授業作りの工夫

本時の指導では、ウォークラリーポイントについて、生徒全員でまとめて、ポスターを作成していく学習活動を設定した。

授業の導入時には、生徒同士が役割を分担して、一つのものを作る場面を多く設定した（図2）。

展開時には、生徒自身が得意な方法を活かせる教材・教具の作成や、学習環境の整備を意識的に行った。また、他の生徒の様子を見たり、生徒が互いに意見を伝え合ったりできるような座席の配置を工夫した。

最後のまとめ時には、自分の思いをうまく言葉にすることが難しい生徒に対して、教師がやり取りを重ねながら、生徒の思いを他の生徒にも分かりやすい言葉で代弁する工夫を行った。また、できあがったポスターを全員で見合う機会を設けることで、生徒たち自身が作成した実感と達成感を味わうことができるようにした。



図2 友達と役割を分担している様子

(3) 実践をふり返って

本単元では、調べたことや見学したことを発表し合うことで、身近な地域への関心や知識を増やしたり、生徒同士で協力したりできるような学習活動を多く設定した。

生徒たちは、色々なことを感じたり思ったりするものの、それを表出することには苦しさがある。そのため、中学部で大切にしている「自分の考えを表現する」、「他者の考えを受け止める」等について探求することは、とても意義のあることであったと考える。本時の前の授業では、生徒の思いをくみ取るために、生徒と教師のやり取りを重視した。その結果、発表の時間を確保できず、生徒同士で思いを共有するためのやり取りにまでつなげることができなかった。前回の反省を踏まえ、本時は生徒たちのやり取りを重ねる場面を大切にした。その結果見られた、生徒同士のやり取りや活動に対する充実感から、授業以外の休み時間にも、作成したポスターについて話題にする生徒の様子が見られた。このような表出に至る過程を大切にしながら、生徒同士をつないでいくことが、これからも必要になると考える。

3 「実際に飲み物を用意しよう」における授業作り

(1) 単元設定の理由

本単元では、「相手のことを考えて手伝いをしてみよう」というテーマのもと、家庭のなかでの「手伝い」に焦点を当てた学習を行い、そのなかで思いやりや礼儀といった振る舞い方を学ぶことをねらいとした。家庭生活や社会生活では、家族をはじめ友人や仲間たちなど周囲の人々との好ましい関わりを築いていくことは、大切なことであると考え。そのなかで、自分の周りの人が気持ちよいと感じることが出来る振る舞い方を知ったり考えたりしながら、人とのやり取りに関心をもてるようにしたいと考え、本単元を設定した。

(2) 授業作りの工夫

本時の指導では、飲み物を実際に注いで相手に出すというロールプレイを行い、生徒同士で「相手が気持ちよいと感じるような振る舞い」について考えたり、意見を出し合ったりする学習活動を設定した。

授業の導入時には、教師が、生徒から出された発言を整理して板書することで、新たな気づきにつなげられるようにした。

展開時には、生徒が考えたことを踏まえて実際に

体験できる場を設け、実際に行ったり、生徒同士で見たりしながら考えられるようにした（図3）。またその際には、生徒同士の気付きがすぐに共有できるよう、実践ごとに相互評価する時間を設けるようにした。

最後のまとめ時には、生徒から出された、「相手を意識した振る舞い」について、教師が整理してまとめ、授業後の家庭生活のなかで活かせる機会について確認する時間を設けるようにした。



図3 実際に飲み物を出す体験時の様子

(3) 実践をふり返って

本単元では、生徒自身が、相手を意識した手伝いの仕方について考え、その後、実際にやってみる場面を繰り返して経験できるようにした。そのなかで生徒は、どのようにしたら相手がうれしく思うのかについて、実感をもって学ぶことができたものと考ええる。授業のなかで、生徒たちから、「相手のことを考えて頑張りたい」、「もっと良くしたい」、「家でもやってみたい」等といった意見を聞くことができた。本実践を通して、教師が生徒たちの意見をまとめ、整理して提示し、フィードバックする過程を大切にすることが重要であることが分かった。これらのことが、生徒同士のやり取りや、自分以外の他者の良さへの気付き、または次の行動へのきっかけにつながっていくものになると考える。

V 考察

中学部では、学部テーマ『友達の考えを受け止め、選択・行動する力』の育成」を踏まえ、授業作りのポイントを検討しながら、対話的な学びの教育実践を積み重ねてきた。

研究の最終年度となる今年度は、単元・題材のなかで、一人一人の学びを見つめながら授業改善を

図ってきた。本時を計画する前に行った授業研究会において、授業を行った教師からは「さらに生徒同士の対話を促すためには」、「さらに生徒の気付きを引き出すには」等といった、学部テーマをさらに深めるような観点での話し合いが行われた。

三つの授業は、学習の形態や生徒の実態等に違いはあるものの、一つの大きな方向性をもって授業が計画されていた。それは「友達の気付きを主体的に受け止めるという姿を大切に、やり取りを重ねる」という点である。中学部で考える「受け止める」とは、受け身的な活動のことではなく、自分の考えを改めて再確認したり、他者の考えを聞いて想像したり、話を聞いたりといった主体的な活動を通して、自らのもつ知識や記憶の輪郭がはっきりとする活動であると考ええる。

「地図にまとめよう」の授業では、生徒が実際に市街地に行って調べたという共通の体験を思い出しながら、二人組で地図にまとめる活動を設定した。これが生徒同士の互いに伝え合う姿に効果的であったものと考ええる。次の「ポスターにまとめよう」の授業では、栃木県の特産品について、役割を分担してそれぞれのテーマを基にまとめ、発表し合うことができる活動を設定した。これらは、生徒同士で互いの知識や思いを共有する姿に効果的であったものと考ええる。最後の「実際に飲み物を用意してやってみよう」の授業では、実際に飲み物を友達に出す体験をしたり、実演している友達の様子を見たりする学習活動を設定した。これらは、互いの気付きを伝え合い、自らの行動に活かそうとする姿に効果的であったものと考ええる。三つの授業のなかでは、生徒たちの学びの姿から、共通した対話的な学びの姿が見られた。それは、他者の気付きを「受け止める」という主体的な姿を通して、丁寧にやり取りを重ね、その過程で生徒自らが気付いたり考えたりしたことを、次の選択や行動につなげていく姿であった。これが、中学部で大切にしたい対話的な学びの姿であると考ええる。また、このような姿は、高等部で多様な考えを受け止めながら、答えが明確に出せない問いと向き合うための土台になる。そのため教師は、普段の生徒との関わりを大切にしたり、生徒の思いや考えを整理して返したり、実感をもって学ぶことができる学習場面を設定したりすることが必要である。

最後に、中学部では、「他者の気付きを受け止め

るという主体的な活動を通して、生徒同士や生徒と教師が丁寧にやり取りを重ね、その過程で生徒自らが気付いたり考えたりしたことを、次の選択や行動につなげていくこと」を、知的障害教育における対話的な学びの一つのかたちとして提案したい。

付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和三年度校内研究の中学部研究（メンバー：川中子靖代，須藤里江，土屋峻人，富川聡，山崎有子，中山道子，岩松雅文，岡澤慎一）として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

文献

岩松雅文・岡澤慎一（2021）知的障害特別支援学校におけるエピソード記録による一人一人の対話性の探求（3）—中学部事例研究「『友達の考えを受け止め，選択・行動する力』の育成」—宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第8号，499-504.

牧田英美里・富川聡・山崎有子・岡澤慎一（2020）知的障害特別支援学校における対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造（3）—中学部における「友達の考えを受け止め，選択・行動する力を育む授業作り」—宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要，第7号，585-588.

令和4年4月1日 受理

Exploring Dialogical Learning in Education
for children with Intellectual Disability (3):
Creating Lesson that foster the ability to accept
the ideas of friends, make choices, and take action
in junior highschool student

Masafumi IWAMATSU and Yasuyo KAWANAGO, Yuuko YAMAZAKI,
Michiko NAKAYAMA, Shinichi OKAZAWA